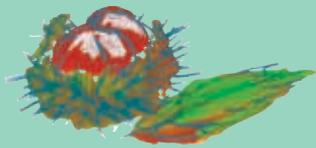


3

連載エッセイ

可能性を 信じて 明日も 語り続ける

吉友 嘉久子

よしともかくこ
Office・よしとも代表

私は縁あって富山に住んでいながら、長い間、カルデラも、砂防も知らなかった。初めて崩壊地に足を踏み入れたときの驚きは、今も忘れられない。ホロホロと崩れた岩が砕けて、一歩動くごとに、貝殻のかけらを踏んだようにカシャカシャと音がする。恐ろしくて足がすくんだ。

幸田文は、自分の目で鳶山の崩れを確かめたい一心で、カルデラで一目も二目も置かれた山の男に背負われて崩壊地に入り、あの『崩れ』を著した。カルデラで足がすくんだ私は、幸田文を背負った当の山の男と出会って、それまでの無知を取り返すように砂防への関心を深めた。彼は自身の体験を通して、自然は命を与え、奪う、と教えてくれた。カルデラには「これで安心」ということは絶対ないと、訥々と諭してくれた。私はその言葉を伝えるために語り部になったようなものだと、つくづく思う。そして、一人より10人で、10人よりは100人で語ろうと、立山砂防女性サロンの会を立ち上げて5年がたった。

この間、性分もあって、がむしゃらに突っ走ったような気がしないでもない。そして今年、常願寺川流域での砂防事業が始まって100年、会は設立5周年の節目を迎えた。

会員は今年も、砂防事業に対する地域住民の理解度や認識度を把握するためのアンケート調査に協力した。富山平野から見はるかす頭の上に崩壊土砂が2億 m^3 もあることを、一体どのくらいの人知っているのだろうか。平野に暮らす人々の安全のために続けられている砂防事業は、どれだけ理解されているのだろうか。それを知りたいと第1回の調査を実施してから3年半、今回は設問をいくつか入れ替えたが、調査の目的は同じである。調査対象が同じではないので一概に比較はできないものの、会の活動が効果を上げて、選択肢の「知っている」系の比率が上がっているのではないかと期待した。

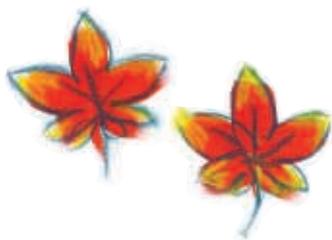
会員の意気込みは相当なものだった。アンケート用紙を手づくりし、手分けして県下全域に配り、数ヵ月の地道な作業をへて寄せられた回答は2,016件。



イラスト 仲野 順子 なかの じゅんこ

年齢分布で今回10代と20代の構成比率が高いのは、前回調査（1,300件）で若者の認識不足の傾向が鮮明だったため、サンプル数を意識的に増やしたという事情がある。図-2

アンケートの大まかな集計結果から、いくつかを、前回調査と比較しながら紹介する。



土石流のことは8割以上の人「知っている」と答えている図-3。しかし、土石流を未然に防ぐ砂防事業について、今回は4割以上の人「知らない」と回答した図-4。土石流を知っていると答えた人の3割強が、土石流災害を未然に防ぐ目的で行われている砂防事業のことを知らないことになる。しかも、前回調査より「知らない」の比率が高い。この数年間の会員の努力が空回りしていたのだろうか、正直なところ落胆した。その一方で、土砂災害に関する報道には9割以上の人「興味を寄せている」図-5。この結果を喜ぶべきだ、とは思。しかし、ニュースになって初めて関心が高まるという現実、砂防事業によって土石流や地すべりの災害が減れば報道も減り、人々の災害に対する関心も薄れる、という側面を暗に示している。そして災害は、きっと人々が忘れたころにやってくるのだ。

観光地立山のもうひとつの顔であるカルデラは、「名前を聞いたことがある」を含めて8割近くが知っている図-6。しかし、砂防事業への理解を深めるために博物館が開催している現地見学会の

ことを知っている人は、今回、「参加したことがある」を含めても5割に届かず、前回は下回った図-7。現地見学会に参加したいと思う人の数も、残念ながら今回に増えてはいなかった図-8。

これだけを見ると、前回より今回のほうが総じて関心が低くなっているが、これは今回のサンプル比率が10代と20代が高く、若者が多かったことと深く関わっていることを示す結果であると推測される。詳細な集計作業を終えていないため、ここにデータで示すことはできないが、全体的な傾向として年代が低いほど土砂災害や砂防事業に対する関心が低く、職業別で見ると学生とほかの職種との間に認識の差が比較的是っきりと現れていることから、それが裏付けられると思う。

若い人に対する啓蒙教育が重要だということは、前回調査で明確になった課題だった。そして今回も、同じ課題が突きつけられたと解釈できる。私たち女性サロンの会の会員にとっては、宿題が赤点つきで差し戻されたようで肩身が狭い。しかし、考えてみよう。常願寺川流域で砂防事業が始まって100年。砂防の語り部オッカチャン部隊は、まだ結成5年だということ。

このアンケート用紙を回収したあとの7月、日本各地は記録的な豪雨に襲われた。地すべりで無残にえぐられた山肌、土石流に何十メートルも流され原形をとどめない民家や自動車の映像が、連日テレビで報道された。そして雨が上がると、途方にくれながらも自宅を泥の中から掘り出そうとする人々と、それを支援しようと駆けつけたボランティアの若者たちの姿が映し出された。ここに希望がある。若さは底知れない可能性を秘めているのだ。そのことを信じて、私たちは明日も語り続ける。

図-1 男女の構成比率

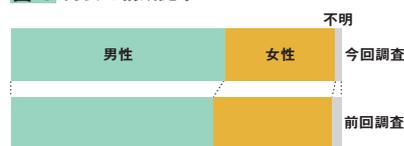


図-2 年代別構成比率



図-3 土石流を知っていますか

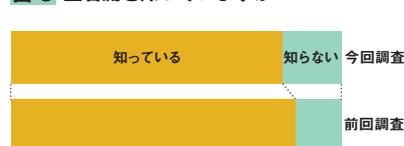


図-4 砂防事業のことを知っていますか

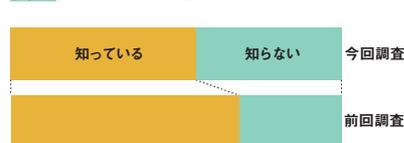


図-5 土砂災害の報道を見ますか



図-6 立山カルデラを知っていますか



図-7 体験学習会に参加したことがある

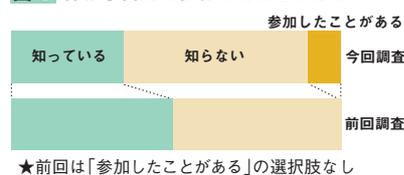


図-8 現地見学会の機会が増えれば参加しますか

